



第120回日本精神神経学会学術総会（札幌）において、編集委員会企画のシンポジウム「論文作成にあたってのラストオーサーの役割」が行われた。論文の査読においては、筆頭著者（以下、FA）だけでなく、ラストオーサー（以下、LA）、責任著者（corresponding author）をはじめ著者全員が、きちんと関与し検討された論文かどうか吟味される。

白倉瞳先生（東北学院大学）、富田博秋先生（東北大学）から、「10年間のコホート調査に基づく東日本大震災被災者における心理的苦痛の経年変化」（原著）の作成過程が紹介された。被災された住民への10年間の支援活動は、被災者であり、支援者でもある町職員と協働するとともに、多職種チームによる支援プロジェクトであった。調査は、基本項目だけでなく、その時々の住民のニーズに沿って、支援に役立つように工夫されていった。そのなかで培われた精神をFAとLAが共有しながら、調査結果のどの部分に焦点をあてるかなどの意見交換をおして論文として結実したのであった。

宇野晃人先生（東京大学）、笠井清登先生（東京大学）からの「22q11.2欠失症候群のある人と家族が抱える福祉制度に関する困難とニーズ—混合研究法によるアンケート回答解析—」（資料）についての発表では、22q11.2欠失症候群のある人と家族への長期にわたる診療、支援の過程で積み上げられた信頼関係に根差した研究であることが感得できた。LAは、本邦での社会福祉の支援制度が不十分な現状を考慮すると、日本語での報告が重要であると考え、当誌に投稿を促された。そして、チーム内での討論をおして論文の質を高めるとともに、出版後に当事者・家族と情報を共有するために、FAとLAが細心の配慮を払われたこと

に感銘を受けた。

「抗うつ薬治療中に非けいれん性てんかん重積状態（NCSE）が出現し、その頓挫後に躁状態を呈した自閉スペクトラム症の40歳代男性の1例」（症例報告）の作成過程の発表が長岡大樹先生（東京大学；FA）、笠井先生（LA）からあった。精神医学の共同創造をめざすために、患者本人や周囲の人が読んでも傷つかない論文にする過程が詳細に報告された。症例報告のオープンアクセスを視野に入れた配慮がFA、LAを含めた教室全体で議論されていた。

最後に、編集委員の西村勝治先生から、研究構想、データの取得・解析・解釈、批評的推敲の過程に実質的に貢献し、論文原稿に承認を行うことが著者資格（authorship）であることが明確にされた。そして、LAが責任著者（corresponding author）である場合には、原稿の投稿、査読、出版の全プロセスにおいて、ジャーナルとのやりとりに責任をもつとともに、編集部からの問い合わせにタイムリーに対応することが重要であること、それに加えて上席著者（senior author）あるいは研究責任者（principal investigator）としてLAが果たすべき教育的な役割が強調された。さらに、LAの名誉（ギフト）オーサーシップへの言及もあった。その後、発表者・シンポジウム参加者との間で熱心な討議が行われた。

本シンポジウムは、FA・LAが、研究にかかわる人たちと共同で論文を作成していくダイナミクスを考えさせるとともに、研究・論文作成という枠組みを超えて、精神科医療・医学のあり方も問う感銘的なシンポジウムであった。本シンポジウムは、総会サイトでオンデマンド配信（10月10日まで）されているので、ぜひ視聴していただきたい。

（細田眞司）